

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 二木 博史



学位申請者 烏雲高娃（ウユンゴワ）

論文名 一九三〇年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相——満洲国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想——

【審査結果】

本学位請求論文は、モンゴル文定期刊行物やモンゴル語教科書に掲載された文章をおもな資料として、満洲国時代前後の内モンゴルの代表的モンゴル人知識人の思想を分析したものである。

清朝の崩壊、中華民国の成立、外モンゴルの独立などのあたらしい状況のなかで、あらたに登場したモンゴル人知識人たちが何を志向し、日本が傀儡国家満洲国をたてたあと、かれらがどのように考え行動したかについて、全体的なわくぐみを提供して今後の研究のたしかな基礎をきずいた点、旧世代の知識人と新世代の知識人を対比させ、日本留学経験の有無によって新世代知識人のかんがえ方のちがいをあきらかにした点が、とくにたかく評価された。

テーマの重要性、利用された資料の質、先行研究に対する理解、総合的な分析能力、結論の独自性のいずれにおいても、本論文は博士論文にもとめられる水準に十分に達しているとみとめられた。

よって審査委員会は、論文審査と最終試験（公開審査）の結果にもとづき、全員一致で、学位申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当と判断した。

2015年1月15日におこなわれた最終審査には、本学の教授二木博史(主査、研究指導担当教員)、佐藤公彦教授（主任指導教員）、野本京子教授（研究指導担当教員）、中見立夫 AA 研教授のほか、学外から吉田順一早稲田大学名誉教授が参加した。

【論文の概要】

本論文は、本文（229 ページ）、参考文献から構成される。全 248 ページ。

本文の構成は、以下のようである。

序論 問題の所在／先行研究／方法と構成

第1部 モンゴル「知識人」の誕生

第1章 モンゴル「知識人」ヘーシンゲーとその教育啓蒙活動

第2章 内モンゴル人ナショナリズムの文化活動

——1920年代のモンゴル語出版事業を中心に——

第2部 「知識人」の成長と成熟

第3章 モンゴル人ナショナリズムの高揚と留学生の思想・活動

——東京と北平——

第4章 モンゴル「知識人」とナショナリズムの発展・成熟

——ハーフンガー——

第5章 1930年代の内モンゴル・ナショナリズムにおける文化と経済

——ブフヒシグとハダー——

第6章 内モンゴル「知識人」の近代的軍事思想と日本

——アスガンと郭文通——

結論

補論

序論では、先行研究を整理しつつ、清朝から中華民国へ移行するなかでの、内外モンゴル統一運動をふくむ内モンゴル地域の独立・自治運動の歴史を概観するとともに、漢民族から自己を防衛する行動としてはじまったモンゴル人のナショナリズムの中心に文化活動があったことを強調し、教育や出版の活動がもっとも発展・成熟した満洲国時代を重点的に研究する必要性をのべる。

全6章は、内容のうえから、モンゴル人知識人が誕生した背景とかれらの活動をあつかった第1部（第1、2章）、新世代の知識人の多様な思想・行動を研究した第2部（第3、4、5、6章）にわかれる。

第1章では、清朝のうえからの改革「清末新政」をうけて、内モンゴル東部ではじまった代表的啓蒙活動の事例であるハラチン右旗領主グンセンノロブの主導した学校建設事業、ロシアによるモンゴル語新聞発行事業に対抗するかたちで、日本人によって発行されたモンゴル語新聞『ムグデニー・モンゴル・セトグール』に掲載された諸論説、満洲国時代のヘーシンゲーの活動などについて記述がなされている。初期のモンゴル知識人を代表するホルチン左翼前旗出身のヘーシンゲーは、おなじ地域出身の盟友ボヤンマンダフ（1945年当時は満洲国興安総省長、1946年に東モンゴル自治政府議長）らと連携しつつ、1910年代すえから積極的に言論活動を展開し、東モンゴル出身者が要職をしめた満洲国時代にはモンゴル語教科書編纂活動で主導的な役割をはたしたことが、のべられている。とくに1944

年にヘーシンガーが編纂・出版した『蒙文補助読本』には、ヘーシンガー自身をふくむ代表的知識人の文章が多数おさめられ、資料的価値がたかいことが指摘されている。

第2章では、グンセンノロブ王が1900年代後半に日本に派遣した留学生のひとりテムゲトが1924年に北京に設立した出版社の活動、奉天（瀋陽）につくられた出版社を中心とした東モンゴルの知識人の諸活動、モンゴル語教科書編纂活動からかいまみられる民族意識などが分析されている。出版による啓蒙活動をすすめていくうえで、モンゴル語による活版印刷の出版社をモンゴル人自身が設立したことは、きわめて重要な意義をもったこと、その意味でテムゲトの蒙文書社、ヘーシンガー、ロルゴルジャブらの東蒙書局の活動が重視されるべきことがのべられている。また清末に漢語で編纂された小学校教科書をもとに編纂された2種類のモンゴル語教科書を詳細に比較し、伝統重視の姿勢（ヘーシンガー、ロルゴルジャブら）と近代化志向（テムゲト、イ・デチンら日本留学グループ）が区別されるとする。

第3章では、新世代の知識人の代表としてナムハイジャブ（北京国立師範大学卒業）とダワーオソル（北京大学卒業）をとりあげ、満洲国時代までの経歴を論じている。また南京国民政府が熱河（Rehe）、チャハル、綏遠（Suiyuan）の三特別行政区を省に昇格させたことにより、内モンゴルという行政単位が完全に消滅し、そのことによってモンゴル人の民族意識がたかまるなか、北平（北京）で勉強していたモンゴル人学生の刊行していた雑誌『モンゴル』（モンゴル語版、漢語版をべつべつに編集）に注目して、同誌に掲載された文章を分析し、他方で日本に留学した学生が東京で発行していた雑誌『祖国（*Ijayurtan ulus*）』に発表された文章と比較して、両グループの民族意識のちがいを論じている。とくにダワーオソルのモンゴル語による文章の内容をこまかく記述し、中国による同化の圧力のなかで、モンゴル民族の団結と教育の重視をうったえたかれのかがえ方や、日本留学生の三民主義をふまえた「革命」志向の言説などをとりあげて、当時のわか知識人の思想をしめしている。

第4章は、満洲国時代の代表的官僚で、1945年8月以降はモンゴル人の民族運動の指導者になるハーフンガーをとりあげている。まずかれが1920年代すえ、1930年代はじめに勉強した東北蒙旗師範学校（奉天）の校長メルセー、教師ヘーシンガーの影響に注目するとともに、校誌に掲載された、モンゴル民族の覚醒をうながす内容の文章を分析している。つぎに1931年9月の「満洲事変」後に内モンゴル独立軍にくわわり、独立軍の歌を作詞するなど、モンゴル民族の独立・自治の運動に直接かかわったことを確認する。またメルセーがかつて書記をつとめた内モンゴル人民革命党に1932年に入党し地下活動に従事したことを重視し、戦後の活動との関連を説明する。再建された内モンゴル人民革命党の書記としての活動、1947年に中国共産党主導の内モンゴル自治政府の副議長に就任するまでの軌跡も記述している。

第5章は、満洲国成立後のモンゴル知識人の文化啓蒙活動を、モンゴル文学会の中心人物ブフヒシグの行動、モンゴル語雑誌『モンゴル・セトグル』に掲載された論説、初期の日本留学生の代表的人物ハダールの思想を例に論じている。最初、北京で1927年に組織されたモンゴル文学会は、満洲国成立後、興安西省の開魯（Kailu）にうつり、さかんに出版活動をおこなったが、主催者のブフヒシグは同時に満洲国の地方官僚として教育行政をになったこと、1935年に満洲国官吏の視察旅行で日本を訪問したときの記録から、ブフヒシグの教育に対するかんがえ方をよみとることができることをのべる。また1927年に笹目恒雄が日本に留学させたモンゴル人のひとりハダールを新世代の知識人の典型とみなし、科学知識の普及を重視した点に特徴がみられると指摘する。

第6章は、アスガンと郭文通（Guo Wentong）を事例として、満洲国のモンゴル軍人の思想と行動を分析している。両名ともわかいときに日本へ留学し、満洲国成立後は日本の士官学校等で軍人としての教育を受け、その一方でモンゴル人民共和国とも関係のある、民族政党たる内モンゴル人民革命党員として地下活動に従事したという共通点を有すること、アスガンは満洲事変後にモンゴル自治軍へ参加し、日本敗戦後は内モンゴル東部での自治運動でモンゴル軍の最高司令官をつとめたこと、満洲国軍少将郭文通は秘密裡にソ連との関係も維持し、戦後はフルンポイル自治運動で中心的役割を演じたこと、これらは、状況の変化にそなえて、つねに複数の選択肢を準備せざるをえなかった、モンゴル人民族主義者のおかれた状況をよくしめしていると分析する。

結論では、各章の内容を整理したうえで、日本留学グループと非留学グループは、固有文化をまもったうえで「近代化」をすすめるか、近代的な知識を受容することによって民族の将来を確保するか、という点でかんがえ方のちがいがあつた、というかたちでまとめている。

補論では、オーウェン・ラティモア（Owen Lattimore）の *The Mongols of Manchuria*, New York, 1934（邦訳名『満洲に於ける蒙古民族』）について論じ、満洲国成立直後の内モンゴル東部の社会状況を的確にえがいた基本的文献として再評価している。

【論文の評価】

20世紀前半の内モンゴルの知識人たちは、清朝の崩壊、中華民国の成立、ロシアの援助のもとでの外モンゴルの独立、日本による傀儡国家満洲国の建設という激動のなかで、外モンゴルを求心力とする内外モンゴル独立運動、中華民国のわくないでの自治というふたつの選択肢を視野にいれつつ、教育と啓蒙によって自民族の力を強化するため、さまざまな運動を展開した。

本論文は、これら知識人の活動について、満洲国時代に重点をおきつつ、その全体像をえがきだそうとしたところに特徴があり、そのころみは、かなりの程度、成功したと評

価しうる。それは、モンゴル語・漢語によって刊行された定期刊行物（新聞・雑誌）を渉猟して必要な資料をさがしだすという、地道な作業のつまかさねによって可能になったが、これら資料のおおくは、中国では大部分が散逸し、おもに日本の諸機関に所蔵されているので、日本に留学して学位論文を執筆するのに適したテーマを選択しえたといえることができる。

内モンゴルの知識人の思想が体系的にのべられた資料は、内モンゴル人民革命党の綱領をのぞけば、ほぼ皆無にちかく、そのような資料状況のなかで、さまざまな民族主義者の言説をあつめ、一定の分析をしえたことは、今後、この分野の研究を深化させるうえで、基礎となる研究成果といえよう。

資料の面では、第3章でとりあげられた、北京で刊行された雑誌『モンゴル』、東京で発行された『祖国』に掲載された諸論説は、きわめて重要であるにもかかわらず、これまで本格的にとりあげられたことがなく、本論文ではじめて研究が着手されたといえてよい。

旧世代の知識人、新世代の知識人という分類は、あらゆる場合に有効というわけではないが、記述のうえでは有用である。知識人を日本留学グループと非留学グループにわけると分類は、近代の内モンゴルに対して日本があたえた巨大な影響を考慮した場合、きわめて妥当な区分だとみとめられる。

つぎに、審査委員からだされた、今後の課題とすべき問題にかかわる主要なコメントや質問は、以下のとおりである。

(1) 「ナショナリズム」と「民族主義」が併用されているが、そのちがいが明確にしめされていない。「文化ナショナリズム」を重視する立場をとるとしても、20世紀前半のさまざまに変化する状況のなかで、それがどのように変容したかについて、もうすこしくわしい記述・分析が必要ではないか。

(2) 論文のタイトルが「1930年代」となっている点。1932年の満洲国成立のあと、知識人の活動が多様化したことは、みとめるとしても、実際には1920年代以前、1940年代以降に論文のかなりのスペースがさかれているので、タイトルを再考するべきではないか。

(3) 1910年代以降、内モンゴルの知識人はつねに独立した外モンゴルの方向に目をむけ、耳をかたむけていた。そのような内モンゴル知識人の心理が十分に考慮されていないようにおもえる。モンゴル人民共和国、コミンテルンの直接的な支援によってなされた内モンゴル人民革命党の活動の重要性に対する認識がややよわいのではないか。

(4) 今日の内モンゴルがかかえる社会問題への著者の危機感が論文に投影されすぎている場合がある。

(5) 清代の基本的な社会制度である領主制、盟旗制などがどのように残存し、内モンゴル社会の「近代化」に影響をあたえているかについての、知識人たちのかんがえ方が、も

うすこし具体的に論文に反映されたほうがいいのではないか。

これらのコメント、質問は、ウユンゴワ氏の研究成果を十分評価したうえで、今後の研究にさらに期待する意味でなされたものだが、これらに対するウユンゴワ氏の受けこたえは具体的かつ誠実であり、現段階での研究の到達点と今後の展望を十分に自覚していることが確認された。

論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、上記の結論に達した。